

業務用ナバナの連続収穫技術



和歌山県農業試験場 栽培部 研究員 嶋本 旭寿

1. はじめに

和歌山県では平成24年から食用ナバナの業務向け栽培が行われています。業務用ナバナはコンテナにバラ詰め出荷されるため、出荷調整が容易で、生産規模の拡大が可能となりました。

しかし、ナバナは頂花（主茎が抽苔し、先端に蕾をつけたもの）の収穫から側枝の収穫までに数週間かかることから、収穫期間中の収量が大きく増減するという問題があり、安定した連続収穫技術の開発が求められています。

そこで、主力品種である‘CR花かんざし’と同日播種で収穫ピークを分散できる品種を調査するとともに、‘CR花かんざし’の播種日による収穫ピークの分散効果について調査を行いました。

2. 材料および方法

供試品種として、早生品種の‘寒咲21号’（サカタのタネ）、‘CR春華’（カネコ種苗）、‘CR京の春’（丸種種苗）、中生品種の‘CR花かんざし’（丸種種苗）、‘CR栄華’（サカタのタネ）、中晩生品種の‘CR華の舞’（丸種種苗）、晩生品種の‘花ぐるま’（丸種種苗）を用いました。

2019年9月11日に与作N-150を充填した128穴セルトレイに各品種を播種し、3.5葉期となる10月3日に畝幅100cm、株間35cmの1条植え（2,857株/10a）で定植しました。

また、‘CR花かんざし’については、1週間後となる9月18日にも播種し、10月15日に定植しました。

頂花は蕾の先端から6cm、側枝は8cmで収穫し、規格品1本の平均重量が4gを下回る日まで収穫調査を行いました。

3. 試験結果

1) 収穫期間（表1）

‘寒咲21号’は‘CR花かんざし’と収穫開始日に差がなく、‘CR春華’および‘CR京の春’は需要期（2月～3月上旬）に収量を得られなかったこ

とから、組み合わせ品種として不適でした。‘CR栄華’は1週間、‘CR華の舞’と‘花ぐるま’および9月18日播種の‘CR花かんざし’は約3週間遅れて収穫開始となりました。

表1 収穫期間

早晩性	品種	収穫開始日 ^z	収穫終了日 ^y
早生	寒咲21号	12月9日	2月23日
	CR春華	11月23日	1月20日
	CR京の春	11月28日	1月20日
中生	CR栄華	12月14日	3月6日
	CR花かんざし (9月18日播種)	12月8日	2月28日
中晩生	CR華の舞	12月29日	3月2日
晩生	花ぐるま	12月28日	3月6日

播種日：9月11日

z: 調査株の頂花が収穫された日の平均値(n=10)

y: 規格品1本の平均重量が4gを下回った日

2) 一次側枝の収穫ピーク（図1）

‘CR栄華’は‘CR花かんざし’と収穫ピークが重なり、分散効果は認められませんでした。‘花ぐるま’および9月18日播種の‘CR花かんざし’は‘CR花かんざし’の収量が減少する1月上旬から収量が増え始め、2週間遅れて収穫ピークを迎えました。‘CR華の舞’は4週間遅れて収穫ピークを迎え、‘CR花かんざし’の低収量期間を補うことができました。

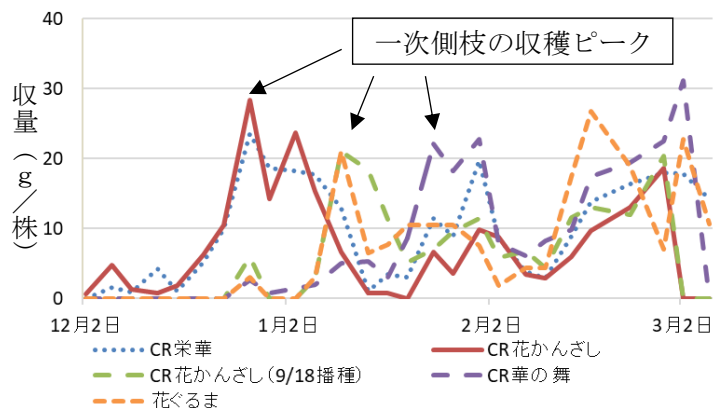


図1 一次側枝の収穫ピーク

3) 収量および秀品率 (表 2)

9月18日播種の‘CR花かんざし’は収穫開始が遅かったため、規格品収量は9月11日播種と比べて下回りましたが、秀品率は同程度でした。‘CR華の舞’は‘CR花かんざし’より規格品収量が多く、秀品率も上回りました。‘花ぐるま’は腐敗花の発生が多く(データ省略)、秀品率で‘CR花かんざし’を下回りました。

表2 収量および秀品率

品種名	1株あたり収量(g/株)		秀品率(%)
	規格品	規格外品	
CR花かんざし	198	70	74
CR花かんざし (9月18日播種)	167	68	71
CR華の舞	215	27	89
花ぐるま	195	111	64

4) 連続収穫が可能な組み合わせ (図 2)

‘CR花かんざし’と‘CR華の舞’を同日播種するとともに、‘CR花かんざし’を1週間遅れて播種する組み合わせが有望であると考えられました。この組み合わせでは、‘CR花かんざし’のみと比較して、総収量は変わらずに、収穫期間中の収量を平準化することができました。

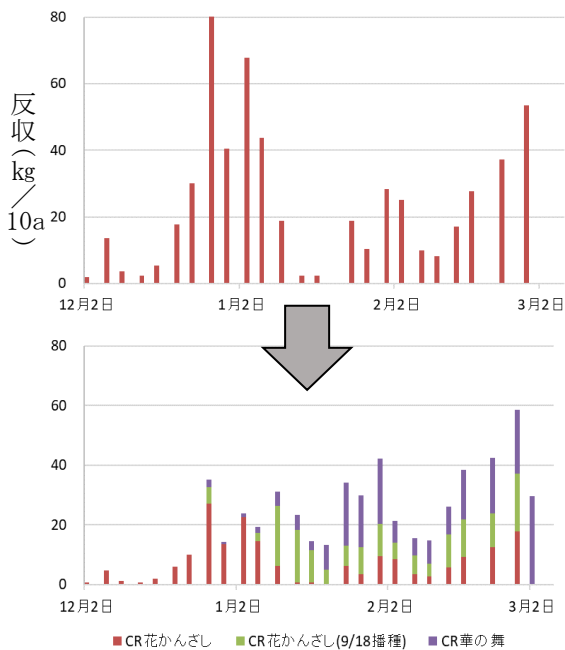


図 2 連続収穫が可能な組み合わせ

上図は‘CR花かんざし’を10a(2,857株)栽培した場合、下図は各種を3等分(各952株×3)して10a栽培した場合を示す。

4. おわりに

今回の試験で明らかとなった連続収穫が可能な組み合わせについて、2020年にも確認試験を行いました。その結果、‘CR花かんざし’と‘CR華の舞’の同日播種では、前年と同様に収穫分散効果が確認できました。一方、‘CR花かんざし’を1週間ずらして播種する組み合わせでは、気象条件が原因で定植日に差がなかったため、収穫分散効果は認められませんでした(データ省略)。播種日をずらして栽培する場合には、定植日もずらすようご注意ください。